

2021年11月14日(日) 主日朝礼拝説教

『主を仰ぎ見る人の顔』井上隆晶牧師
創世記4章1～10節、ルカ23章32～34節

①【なぜ神はカインとその献げ物に目をとめなかったのか】

アダムとエバには兄カインと弟アベルという二人の兄弟が生まれました。カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となります。ある日この二人の間に事件が起こります。カインは土の実りを主のもとに献げ物として持ってきましたが、アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持ってきました。「主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。」(創世記4:5)と書かれています。なぜ、神様はカインとその献げ物を受け入れなかったのでしょうか。何も書かれていません。ただアベルの献げ物は「肥えた初子」とあるのに、カインは「土の実り」としか書かれていないので、アベルが最上のものを献げ、カインは「劣った余り物」を献げたのではないかと推測することもできます。でも聖書には、はっきりと書かれていないのです。ただ、神様が「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。お前が正しいのなら顔を上げられるではないか。」(同4:6～7)と言われた言葉から判断すると、何か「正しくない心」「罪」を内に秘めていたという事だと思うのです。それは何だったのか分かりません。ただ分かるのは、激しく怒るくらいにカインは自分に対する神様のなされ方が気に入らなかった、ということなのです。アベルばかりを祝福し自分を祝福してくれない、アベルばかりを愛し、自分を愛してくれない、と不満に思っていたということなのです。だから形的にはカインも最上の物を献げていたかもしれませんが、神様は心を見抜かれますから、受け取らなかったのだと思います。この後、カインは弟アベルを誘って野原に行き、そこでアベルを襲って殺してしまいます。

この世は公平ではありません。はっきり言って不公平なものです。生まれながら病気をもって生まれてくる人もいますし、五体満足で生まれてくる人もいます。お金持ちの家に生まれる者もいますし、貧しい家に生まれる者もいます。社会制度に欠陥がある場合は、改善されなければなりません、どこまでいっても完全に平等・公平な社会など出来っこありません。そのような時、神様は不公平な方だと言う他ありません。それが現実であり、この物語の根底には「神の不公平さ」があるのです。

②【神になぜと問うてもいいのです】

このような時、私たちは神様に「あなたはなぜ、私ばかりをこんな目に遭わせるのですか?」と問うていいのです。イエス様も神様に「なぜ」と祈られました。イエス様はゲッセマネの園で「この杯を取り除いてください」と祈られましたが、神様は沈黙されていました。そこで最後に「御心がなりますように」と祈られま

した。十字架の上でも「なぜ、私をお見捨てになったのですか」と祈られました
が、神様は沈黙されていました。そこで最後に「御手に委ねます」と祈られまし
た。神が沈黙されて「答えが与えられない」ことがほとんどです。それでも祈る
のです。「なぜ？」と問うことは信仰が無いからではなく、信じているからです。
私はカインが神様に「なぜ私をこのように扱うのですか」と、どうして喧嘩腰で
あっても訴えなかったのかと思います。そうすれば、彼の怒りは神様にぶつけら
れ、隣人の弟にぶつけることはなかったでしょうに。内に籠った怒りは、ふつふ
つと発酵し、それは憎しみとなって隣人のアベルに向かい、彼を殺してしまいま
した。病気になると体の一番弱い所に、熱が溜まり、痛みが出ます。同じように
一番弱かったアベルに怒りが向けられたのです。神はカインに「罪は戸口で待ち
伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」(同4:7)と言
われましたが、罪を支配する方法が、神に向かう祈りなのです。

詩編34:6に「主を仰ぎ見る人は光と輝き、辱めに顔を伏せることはない。」とあ
ります。神に顔を向けて祈れば、やがてカインも光となれたのです。顔を伏せず
に、怒ったままでも神に顔を向け祈るのです。祈りの中で私たちはよく「あの人
をこう変えて下さい」「この悪い状況を良い状況に変えて下さい」と祈ります。
周りが変わることも時にありますが、何よりも祈りの中で変わるのは祈っている当
人なのです。祈る人は祈る中で変わります。「主を仰ぎ見る人は光と輝き」です。
神と対話をしたモーセの顔が光っていたと書かれています。神の見えない光、造
られざる光を受けて、その人は変容します。

●先日の朝の祈りの時、讚美歌21の208番を歌いました。1番に「起きよいざ、
主の御前に」と歌った時、「ああそうか、人は毎朝、神に向かって起きます」と
思いました。世の人は仕事に向かい、この世に向かって起きますが、私たちは違
います。神に向かって起きますのだと思いました。2番に「罪と咎、すべて除き、神
の家に住もう一人とならせたまえ。」と歌った時、聖霊が耳元で囁きました。「あ
あ、そうか、神が人間に自分の家に住んでほしいので一方的に私たちの罪と咎を
すべて除くのだ」私たちが自分の罪を取り除いてほしいと思うよりも、神の思い
の方が強いのです。私たちはいつも頭の中が自分の思いばかりでいっぱいなの
ですが、神の思いを考えたことがあるでしょうか。それに気づいた時、私たちは変
わるのだと思います。

聖書を聞く中で、讚美を歌う中で、祈禱文を読む中で、私たちは神を知り、神の
思いを知り、自分が変わるのです。殺人罪を犯したカインを神はしるしをつける
ことをもって守りました。ここにも神の慈しみと愛が溢れています。パウロが「す
べてのものは光にさらされて明らかになります。明らかにされるものはみな、光
となるのです。」(エフェソ5:13)と言いましたが、その通りなのです。そのパ
ウロ自身もキリストに照らされて、初めて自分の罪と神の赦しと愛を知りました。
光である神との交わりは何とすばらしいものでしょう。

③【神が置かれた環境で】

●下村湖人の小説で「次郎物語」というのがあります。次郎の叔父である教師は、いじめられ、反抗的になっている次郎を山に連れて行き、弁当を食べながら、大きな岩の裂け目に根をはって、そびえる松の大木をさして次郎に言います。

「命というものが、どんなものか分かるだろう。硬い岩を二つに割って、だんだん大きくなる。命の力ってたいしたもんだ。しかし、卑怯な命は役に立たない。卑怯な命というのは、自分の運命を喜ぶことのできない命だ。何百年か昔、松の種は、不幸にも岩の割れ目に落ちた。それはその種の運命で、種自身では、それをどうすることもできない。…この運命の中で、出来るだけ生きようと努力しなければならない。これが本当の命。運命を喜ぶという事が本当の命。この松には本当の命があったから、岩をも割ってしまうほど立派に成長した。今では、岩にはさまれたままだが、それは何でもないことになってしまった。」

更に叔父はこうもいいます。「闘う事ばかりを考えていると、つい無茶をする。無茶をしたら、運命には勝てない。勝とう勝とうとあせって、自分の力の及ばないことや、道理にはずれたことをすると、却って負ける。芽を出した松は、どんなに力んでみたって、すぐに岩は割れない。運命に勝ちたかったら、じりじりと、自分を伸ばす工夫をしろ！」

人生で思いがけない苦労や苦難が襲ってきた時、神様からの訓練だと思って受け取らなければなりません。その中に身を浸し、そこから逃げないようにし、その中でじっと体力と人間力を身につけるのです。そして神の細やかな愛の手を探すのです。エレミヤはこういいました。「若い時に軛を負った人は、幸いを得る。軛を負わされたなら黙して、独り座っているがよい。塵に口づけせよ、望みが見いだせるかもしれない。打つ者に頬を向けよ。十分に懲らしめを味わえ。主は、決してあなたをいつまでも捨て置かれはしない。」(哀歌3:27~31)

ヤコブの末の子ヨセフも、彼ばかりが父親に可愛がられていたので兄たちが嫉妬してエジプトに売られてしまい、そこで奴隷となり、更に無実の罪で牢屋に入れられてしまいました。しかしそのすべては神の計画であって、訓練の時でした。彼は牢屋の中で神に祈り、夢を解く力をいただき、その後、王様の夢を解くことによって大臣となり、エジプトと多くの民を飢饉から救いました。人は試練の時に人間的に成長し、神の思いを知り、信仰も成長します。

人生は不公平なものです。神がなぜ、そのようになさるのか分からない時もあります。でも皆さんは神に愛されました。その証拠は、皆さんの中には「本当の命」が入っているということです。それはどんなに迫害されても、押しつぶされても、死なないキリストの復活の命です。「本当の愛」が入っているといってもいいと思います。あなたを決して見捨てない愛です。その神の思いを知りましょう。あなたはどんな岩に挟まれても必ず勝ちます。それを信じ、その命を育てましょう。